

岩手県文化財調査報告書第55集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— VI —

(一関地区 東裏遺跡)

昭和55年3月

岩手県教育委員会
日本道路公団

東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

—VI—

(一関地区 東裏遺跡)

序

地域開発に伴う交通網等の整備事業は、現代社会の進歩発展から生じる必然的な要請であり、県内においても、このような建設事業が、多く計画・実施されております。

しかしながら、これらと関連してくる埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で、嘗々と培い育て上げてきた貴重な文化遺産であり、その保存をはかり、活用を考え、新たな文化創造の糧としていくことも、現代に生きる私たちの責務であります。

国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道は、産業・経済開発の大動脈として各方面からの期待をになって、県内を南北に縦貫してつくられる大規模な建設工事であり、一関盛岡間がすでに供用され、現在は更に秋田・青森県境へと工事が進められております。この建設工事の施行に關係した一関・西根インター間99遺跡について、日本道路公団仙台建設局からの委託をうけ、岩手県教育委員会が調査主体となって、昭和47年度から53年度までの7年間にわたって発掘調査を実施し、その整理作業と報告書の作成を昭和53年度から4か年計画で、現在実施しております。

本書は東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第6分冊目として「東裏遺跡」を収録しております。当遺跡からは縄文晩期の遺物包含層が検出され、大量に出土した遺物と、その出土状況等から、多角的な分析究明が試みられ、当時の生活や、行動範囲等を知る上で、多くの成果を得ることができました。

この報告書が、記録保存の成果として社会教育や学術研究の場に役立つことを切望いたしております。

ここに、調査について御援助・御協力をいただいた地元教育委員会はじめ関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

昭和55年3月

岩手県教育委員会

教育長 新里 盈

発掘調査にいたる経過他

岩手県における東北自動車道建設は、昭和40年11月の仙台・盛岡間の基本計画策定に始まり、昭和43年4月の施行命令により具体化した。そしてこれにかかる埋蔵文化財については岩手県教育委員会が中心的に取り扱うこととなった。まず昭和42・43年に一関・盛岡間の路線予定地内分布調査を実施し、路線の調整を行ない、路線決定後は昭和47年に路線内現地確認等を実施した。その結果、一関・盛岡間に82ヶ所の調査対象遺跡が決定された（その後の追加分を含めて最終数90ヶ所）。この区間内の発掘調査は昭和47年の金ヶ崎町・北上市・花巻市より開始され、昭和52年の盛岡市太田方八丁遺跡で終了した。

その間、昭和49年6月、盛岡・安代間の路線発表があり、このうち盛岡・西根（松川まで）も調査対象に加えられ、その間の9遺跡、さらには紫波インターチェンジ関連の3遺跡も調査され、結局、一関・西根（松川）間の調査は昭和53年に終了することとなる。同区間の遺跡は99ヶ所を数えた。

そのうち水沢市石田・江釣子村鳩岡崎・紫波町上平沢新田の遺構（竪穴住居跡）、江釣子村猫谷地の古墳、紫波町墳館の墳墓、同柳田館、盛岡市太田方八丁の遺構は施工方法・設計変更によりその一部を保存することとした。

調査結果の整理期間は昭和52年に4ヶ年間と決定され、翌53年度より、一部発掘調査と併行する形で整理・刊行作業が開始された。刊行計画は昭和53年度I（盛岡地区）・II（矢巾地区）、同54年度III（紫波地区）・IV（同柳田館）・V（一関地区）・VI（同東裏）、同55年度花巻・和賀地区・水沢地区、同56年度北上地区・太田方八丁・栗田の順である。

最後に、本遺跡の調査にいたる経過を示す。本遺跡は、衣川村北館遺跡の発掘調査に併行して実施した周辺の分布調査により東北縦貫自動車道用地内に「発見」され、当該年度の事前調査対象地に新規に加えられたものである。昭和48年7月27日現地確認、同28日試掘・包含層残存確認、同31日本課と日本道路公団水沢工事事務所の立会協議・調査実施決定、8月9・10日グリッド設定、8月28日本調査着手という手続きを経た。

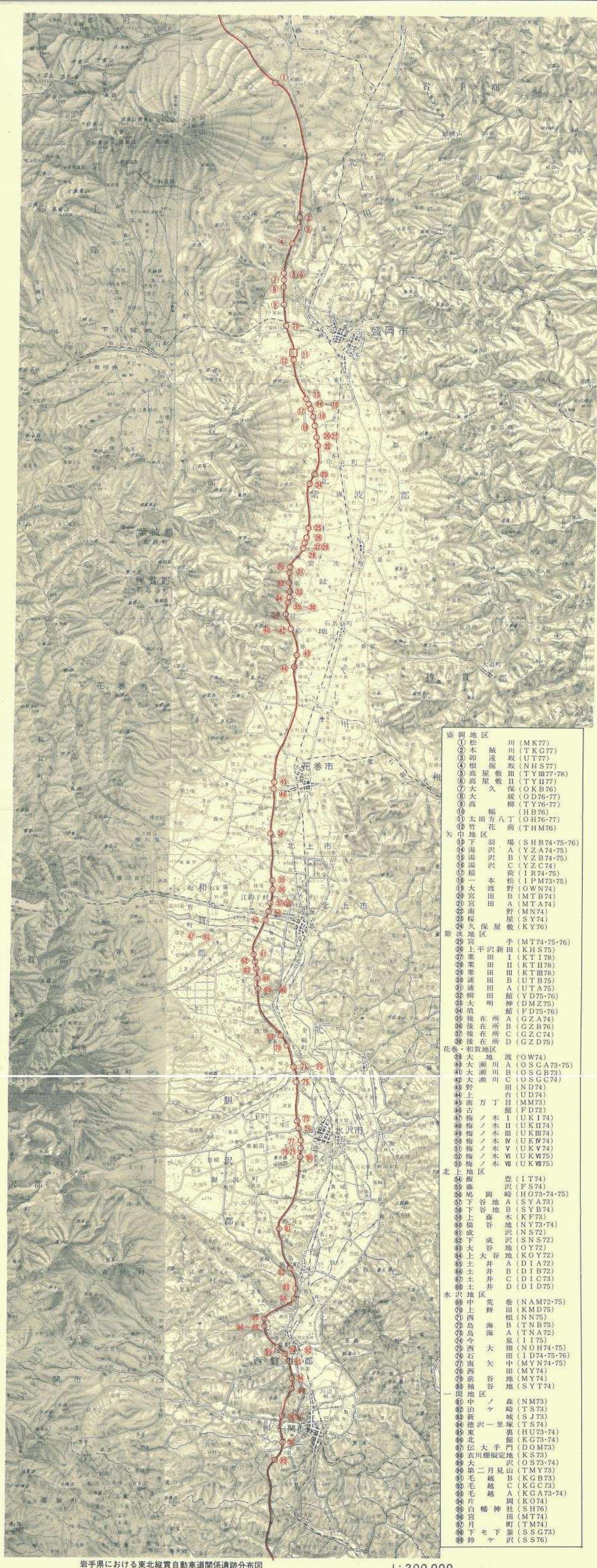
このような年度途次の新規発見・追加は基本的には手ぬかりのそしりは免がれまい。それが単に事前調査に種々の不利な条件を賦与するのみならず、遺跡把握の不十分さを露呈したこととなるからである。遺跡所在の正確な把握が埋蔵文化財保護の基礎的要件であることを考慮し今後改善されるべき点である。本課の反省点であり、あえてふれておく。

先にふれた調査地周辺に実施する分布調査は、調査遺跡の性格・歴史的位置のより正確な把握と遺跡分布のより正確な把握をはたすことの両様を意図したものである。

本遺跡「発見」に際しては、旧地権者千葉太四郎氏の種々のご協力をうけた。記して深甚の謝意を表する。

第一表 東北自動車道関係調査遺跡一覧

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度	地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度	地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度
西	根町	1	松川	52		26	上平沢新田	50		51	梅ノ木V	49		49-50-51
流	本坂村	2	木坂	52	禁	27	栗田I	53	賀	52	梅ノ木VI	50		49-50
盛	那坂村	3	那坂	52		28	栗田II	53		53	梅ノ木VII	50	JR	49
	根坂	4	根坂	52		29	栗田III	53	北上市	54	楓	49		49
	高屋飯田	5	高屋飯田	52		30	瀧田B	50	北江釣子村	55	楓	49		49
	久保	6	久保	52		31	瀧田A	50		56	國崎	48-49-50	旭沢町	48
	大久保	7	大久保	51		32	柳田館	50-51		57	下谷地A	48		48
	大柳	8	大柳	51		33	大明神館	50		58	下谷地B	49		48
	高柳	9	高柳	51		34	埴後在所C	50-51		59	藤木	48		49
	盛岡市	10	幅	51		35	後在所A	49		60	猫谷地	48-49	衣川村	48-49
	太田右八丁	11	太田右八丁	51-52		36	後在所B	51	北上市	61	成沢	47		49
	竹花前	12	竹花前	51		37	後在所C	49		62	下谷地	47		48
	都南村	13	下羽場	49-50-51		38	後在所D	50		63	大谷地	47		48
	湯沢A	14	湯沢A	49-50		39	大瀬	49		64	上大谷地	47	平泉町	48-49
	湯沢B	15	湯沢B	49-50		40	大橋川A	48-49		65	土井A	47	第二月見山	48
	湯沢C	16	湯沢C	49		41	大橋川B	48		66	土井B	47	毛越	B
	荷	17	荷	49-50		42	大橋川C	49		67	土井C	48	毛越	C
	一本町	18	一本町	48-50		43	野田	48		68	土井D	50	毛越	A
	渡野	19	渡野	49		44	上合	49		69	荒巻	47-50		49
	官田	20	官田	A	49	化粧市	45	南万丁目	48	70	上解田	50		49
	官田	21	官田	B	49		6	古館	47	71	西海	50	一関市	51
	萬野	22	萬野	49		47	梅ノ木I	49		72	鳥海	50	宮町	49
	星	23	星	49		48	梅ノ木II	49		73	鳥海	47	下毛下屋	48
	久保里飯	24	久保里飯	51		49	梅ノ木III	49	水沢市	74	今泉	50	鶴沼	51
	菅原町	25	菅原町	49-51		50	梅ノ木IV	49		75	大畠	49-50		



岩手県における東北縦貫自動車道関係遺跡分布図

1: 200,000

20 キロメートル

例　　言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道建設関係埋蔵文化財報告書VIとして、昭和48年度に調査を実施した東裏遺跡について作成したものである。図録集的性格の強いものとした。

2. 発掘調査概要　遺跡名　東裏（ひがしうら）　略号　HU73
所在地　岩手県胆沢郡衣川村大字下衣川字東裏60番地
調査期間　昭和48年8月28日～同11月3日、同49年4月
調査面積　約1,840m²
調査担当者　岩手県教育委員会事務局文化課
瀬川司男　島隆　上野猛　三浦謙一　小野寺たみ
久永瀬幸子　大泉芳子　相原康二（調査責任者）

3. 本事前調査の実施にあたって、調査の経過・段階に応じた以下のテーマを設定した。

- (1) 縄文時代晚期遺跡の立地論的検討
- (2) 該期の遺構の有無の確認—本県における晚期遺構の類例の蓄積の必要性（その稀少性をかえりみて）
- (3) 所謂遺物包含層の、集落的における位置の検討—空間的なそれ・機能的なそれ等の検討
- (4) 各種遺物の出土状況の把握—所謂廃棄のパターンなどの特異性の認識
- (5) 遺物包含層の形成過程の把握—空間的・時間的推移の把握
- (6) 古環境復元のための各種資料の採取—花粉・動植物遺存体他

大略以上である。この諸テーマの具体化は、別項に述べた如き本事前調査の特殊性と調査責任者の力量不足から、必ずしも十分になしえなかつたものが多い。とりわけ(4)には詳細な出土状況図の作成が不可欠の要件であるが、模式図の作成にのみとどめた。これはまことに遺憾であり、意慢のそしりは免れないところである。少なくとも「好条件下」での事前調査を確保することは、事前調査担当者に課せられた義務の一つであり、その実現のための努力を怠ってはならない点を痛感している。

4. 整理にあたっては別に「整理要項」（省略）を定め、それにしたがった。

調査成果とりわけ遺物類の整理にあたっては、基礎的事実の報告を主目的としたがそれに際し大略以下のテーマを設定した。

- (1) 土器の組成内容の把握—細別と統合による、さらには組成比率の把握
- (2) 土器器種の機能の想定—形態面に加え機能的側面からのそれの想定
- (3) 施文モチーフと器種・部位との関係とその推移の把握—従来の文様観の確認・点検
- (4) 土器類の胎土分析—考古学的方法論による分類と胎土含有物（とりわけ岩石・鉱物類）

の異同の相関関係の有無の確認

- (5) 石器の組成内容と組成比率の把握
- (6) 各種石器の属性の把握—形態・技法・素材等、とりわけ不整形な石器の観察
- (7) 破損状況の傾向性の把握—從来想定されてきた機能との関係
- (8) 動・植物遺存体の同定

以上である。縄文時代晩期の遺物包含層の常として、大量の遺物の出土をみた。それは物理的に圧倒的に多量なものであったが、それらの可能な限りでの多数に対して記録を作成することとした。それは本事前調査が所謂記録保存を前提としている性格を考慮した故のみならず、多量さ故に各種の“傾向性”を認識しうるのではないかとの期待をもったからである。したがって各種の計測・実測を施こし、かつその結果を繁雑なまでに提示することとなつた。いずれにせよ所謂事実の報告を最少限果たしうるものではある。加うるに、各種計測値の提示(とりわけ完全品のそれ)が“縄文晩期人”の度量衡等の意識を推しはかる手段の一つになしうるとの期待ももつた事実もある。さらには、遺物包含層出土遺物が狭義の遺構出土遺物でない故をもってその価値を減殺する傾きをも考慮した事実もある。

自然科学的分析方法の援用も本課の課題の一つであることは既に明らかにしてきた所であるが、ここではそのうちの土製品の胎土分析に若干比重をかけて実施した。この種分析結果（基礎資料）の蓄積のためである。

5. 各種の遺物実測は通常行なわれている方法によつた。

- (1) 土器については、基本モチーフ（単位）とその展開状況を示すことを主要目的とした。したがって、円弧を用いての割りつけを基本として多用し、かつ、文様の展開図をもあわせ付すこととした。また必要最少限の器面調整技法を模式的に示した（矢印等）。沈線乃至彫刻的施文の表現は、最深部（底面）を太目乃至黒色塗りつぶし、最上位（上端）を複数の細線（破線状）の二種の組みあわせによつた。
- (2) 石器は表裏（腹背面）二面・断面の組みあわせとするのを原則としたが、稀には片面のみのものもある。アスファルト等の付着状況を別に表記したものもある。
- (3) 拓影図は、部位と施文モチーフの関連を重視した示し方をした。
- (4) 整理担当は以下のとおりである。

（土器実測）林謙作・長谷川賢・小野寺たみゑ・相原康二

（土製品実測）相原康二

（石器実測）田村莊一・中村清也・及川範人・阿部佑子・亀ヶ森恭子・工藤恵里子・木村キエ子・石田千鶴子・福士多恵子・館川幸子

（各種計測）相星輝子・浅見正子・潮田弘子・佐藤トミ

(トレース) 斎藤富美子・横沢美江・相星輝子・菊池純子・佐藤美子・相原康二

(拓影図作成) 相星輝子

(ラベリング他) 漆原悦子・小西エイ子

(写真撮影) 土器一三上昭、その他一相原康二

なお骨角器・獸骨片その他は金子浩昌氏、土器胎土偏光顕微鏡写真は照井一明氏、
鮫歯化石は佐藤二郎氏のそれぞれ手になるものである。

(編集・執筆) 1-(1)地形概観 狩野敏男、その他は相原康二

6. 本事前調査・整理にあたっては、次の諸氏・諸機関のご教示・ご指導をえた。記して深甚
の謝意を表する。なおここには記さないが、多くの人々のご協力をえたことはいうまでもな
い。それらなしには本調査・整理はなしえなかつたであろう。

鈴木公雄(慶應大学)・藤村東男(慶應女子高)・林謙作(北海道大学)・須藤 隆(東
北大学)・藤沼邦彦(東北歴史資料館)・横山勝栄(新潟県上海府中学校)・小林正史(東北
大学)・高田和徳(一戸町教育委員会)・伊藤鉄夫(水沢市)・熊谷常正(博物館建設事務所)
清水芳裕(京都大学・土器胎土分析法)・照井一明(岩手県立種市高等学校・土器胎土分析)
・佐藤二郎(岩手県立杜陵高等学校・石材鑑定・産出地同定・鮫歯化石鑑定)・金子浩昌(早
稲田大学・獸骨・骨角器同定)・村井三郎(岩手県文化財審議委員・果実種同定)・吉田栄一
(岩手大学・木器樹種同定)

岩手県工業試験場(土器胎土分析・顔料他同定・X線回析他)

バリノ・サーヴェイ株式会社(花粉分析)

日本アイソトープ協会(放射性炭素による年代測定)

元興寺民俗文化財研究所(木器P.E.G.処理)

財團法人 岩手県埋蔵文化財センター

一戸町教育委員会・岩手県教育センター

7. 得た大量の資料は別途計画のもとに公開・保管されるであろう。

目 次

I. 遺跡の位置と地形・環境	(c) sex symbolと思われるもの…106
(1) 地形概観……………3	(d) 装飾品……………107
(2) 遺跡の位置と立地・周辺の遺跡… 3	(e) 土版と思われるもの…107
(3) 周辺の歴史的環境……………7	(f) 土製円盤…109
II. 遺跡の層序と土質・その他…10	C 石器類の出土状況について…116
III. 発見された遺構と遺物	D 石器類の概要…116
1. 遺 構	(a) 原 石…122
(1) 遺物包含層……………14	(b) 黒耀岩…128
(2) 歴史時代の遺構…14	(c) 槌 石…129
2. 遺 物	(d) 石 槍…130.
A 土器類の出土状況について…16	(e) 石 鐵…132
B 土製品の概要	A 類…132
一 土器類	B 類…144
(a) 深鉢型土器…20	C 類…145
(b) 褶型土器…24	D 類…148
(c) 鉢型土器…30	E 類…150
(d) 台付鉢型土器…54	F 類…153
(e) 台乃至脚部…62	(f) 石 锥…158
(f) 盆型土器…63	(g) 石 匙…169
(g) 高环型土器…72	(h) 搓 器…179
(h) 壺型土器…74	(i) 楕円形挫器…185
(i) 注口土器…82	(j) 湾入部ある挫器…191
(j) 香炉型土器…91	(k) 石 笠状…194
(k) 異型土器…92	(l) 使用痕ある剥片…198
二 土製品類	(m) 異型石器…198
(a) 土 偶…94	(n) 片刃石器…198
(b) 土偶頭部または土面…105	(o) 兩刃石器…199
	(p) (磨製)石斧…202
	(q) 石 鐵…206

(r) 粉碎具	210	(g) サメ歯の化石(同定結果)	238
(s) 石棒・石剣類	212		
(t) 岩版	219		
(u) その他の石器	220		
(v) 装飾品	221		
(w) 円盤状石器	221		
E その他の遺物			
(a) 木器	232	1. 立地について	240
(b) 植物遺存体	232	2. 遺物包含層の性格について	241
(c) 動物遺存体	234	3. 遺物包含層の時間的推移について	244
(d) 花粉(分析結果)	236	4. 土器の組成について	244
(e) 顔料他(分析結果)	236	5. 土器施文について	249
(f) 炭化物(年代測定結果)	238	6. 石器の組成と組成比について	253
		7. 石器の材質について	254
		8. 石材産地について	258
		9. 土器の胎土について	262

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第16図 裸型土器実測図(4)	30 7、8、9、11、12類
第2図 地形区分図	2	第17図 鉢型土器実測図(1)	36 1、2a・b・c・d・e類
第3図 遺跡の位置・周辺の遺跡群	4	第18図 鉢型土器実測図(2)	37 3類
第4図 地形断面模式図	6	第19図 鉢型土器実測図(3)	38 3a・b、4類
第5図 遺跡の層序と土質	11	第20図 鉢型土器実測図(4)	39 4a・b、5、6、7類
第6図 遺跡地形・グリッド配置図	13	第21図 鉢型土器実測図(5)	40 7、8a・b類
第7図 遺物包含層模式図	15	第22図 鉢型土器実測図(6)	41 8a・b、9a・b1類
第8図 暗渠排水施設断面図	16	第23図 鉢型土器実測図(7)	42 9b1・b2、10a・b類
第9図 土器出土状況模式図	17	第24図 鉢型土器実測図(8)	43 10a・c・d、11、12a類
第10図 深鉢型土器実測図(1)	21 3類	第25図 鉢型土器実測図(9)	44 12a・b、13a・b・b2類
第11図 深鉢型土器実測図(2)	22 3類	第26図 鉢型土器実測図(10)	45 13b、14a・b、15類
第12図 深鉢型土器実測図(3)	23 2~4類	第27図 鉢型土器実測図(11)	46 15、16a・b類
第13図 裸型土器実測図(1)	27 1、2、3、5類	第28図 鉢型土器実測図(12)	46 16c・d類
第14図 裸型土器実測図(2)	28 3、5、6a・b類	第29図 鉢型土器拓影図(1)	47 後期末、1、2a・b・d・e、3類
第15図 裸型土器実測図(3)	29 6b・10b類	第30図 鉢型土器拓影図(2)	48 後期末、1、2a・b・d・e、3類

第31図 鉢型土器拓影図(3).....	49	第63図 注口土器拓影図(2).....	90
3、4、6、7類		2 b、3 a+b類	
第32図 鉢型土器拓影図(4).....	50	第64図 香炉型土器実測図.....	93
7、8、9類			
第33図 鉢型土器拓影図(5).....	51	第65図 土偶実測図(1).....	99
9 b1、b2、10 a+b+c、脚		1 a類	
第34図 鉢型土器拓影図(6).....	52	第66図 土偶実測図(2)、1 a+b+c類100 sex symbol?、土面?	100
10 d、11、12 a+b、13 a+b1+b2類			
第35図 鉢型土器拓影図(7).....	53	第67図 土偶実測図(3).....	101
13 b1、14 a+b、15類		2 a類	
第36図 鉢型土器拓影図(8).....	54	第68図 土偶実測図(4).....	102
15、16 a+b+c+d類		2 a類	
第37図 台付鉢型土器実測図(1).....	56	第69図 土偶実測図(5).....	103
1 a+b類		2 b、3類	
第38図 台付鉢型土器実測図(2).....	57	第70図 装飾品・土版実測図.....	108
2、3類			
第39図 台付鉢型土器実測図(3).....	58	第71図 土製円盤実測図(1).....	111
3、4類			
第40図 台付鉢型土器実測図(4).....	59	第72図 土製円盤実測図(2).....	112
4、5類			
第41図 台付鉢型土器実測図(5).....	60	第73図 土製円盤実測図(3).....	113
5類			
第42図 台付鉢型土器拓影図(1).....	61	第74図 石器出土状況模式図.....	117
2、3、4類			
第43図 台付鉢型土器拓影図(2)、高環部	62	第75図 剥片接合例(1).....	123
5類			
第44図 盆型土器実測図(1).....	65	第76図 剥片接合模式図.....	126
1、3、4類			
第45図 盆型土器実測図(2).....	66	第77図 剥片接合例(2).....	127
1、4類			
第46図 盆型土器実測図(3).....	67	第78図 黒耀岩片実測図.....	129
1類、鉢型4類			
第47図 盆型土器実測図(4).....	68	第79図 石槍実測図.....	131
4類			
第48図 盆型土器実測図(5).....	69	第80図 石鏃A類実測図(1).....	136
1、4類			
第49図 盆型土器拓影図(1).....	70	第81図 石鏃A類実測図(2).....	137
1、2、4類			
第50図 盆型土器拓影図(2).....	71	第82図 石鏃A類実測図(3).....	138
1、3、4類			
第51図 高環型土器実測図.....	73	第83図 石鏃A類実測図(4).....	139
第52図 壺型土器実測図(1).....	80	第84図 石鏃A類実測図(5).....	140
1、2、4類、異型土器			
第53図 壺型土器実測図(2).....	77	第85図 石鏃A類実測図(6).....	141
1、2、3類			
第54図 壺型土器実測図(3).....	78	第86図 石鏃A類実測図(7).....	142
3、4類			
第55図 壺型土器実測図(4).....	79	第87図 石鏃A類実測図(8).....	143
1、5、6、7、9、10類			
第56図 壺型土器拓影図.....	81	第88図 石鏃B類実測図.....	145
第57図 注口土器実測図(1).....	84	第89図 石鏃C類実測図.....	147
1、6類			
第58図 注口土器実測図(2).....	85	第90図 石鏃D類実測図.....	149
1、4、6類			
第59図 注口土器実測図(3).....	86	第91図 石鏃E類実測図(1).....	151
2 a+b類			
第60図 注口土器実測図(4).....	87	第92図 石鏃E類実測図(2).....	152
2 b、3 a+b、5類			
第61図 注口土器実測図(5).....	88	第93図 石鏃F類実測図(1).....	156
1、2 b、3 a+b類			
第62図 注口土器拓影図(1).....	89	第94図 石鏃F類実測図(2).....	157
1 a、2 a+b類			

第95図 石錐F類実測図(3).....	155
第96図 石錐実測図(1).....	164
I類	
第97図 石錐実測図(2).....	165
I類	
第98図 石錐実測図(3).....	166
I、II類	
第99図 石錐実測図(4).....	167
II類	
第100図 石錐実測図(5).....	168
III類	
第101図 石匙実測図(1).....	173
I、II、III類	
第102図 石匙実測図(2).....	174
III、IV、V類	
第103図 石匙実測図(3).....	175
VII、VIII-1類	
第104図 石匙実測図(4).....	176
VIII-1・2、IX、X-1類	
第105図 石匙実測図(5).....	177
X-1・2類	
第106図 石匙実測図(6).....	178
X-1・2、II類	
第107図 石匙実測図(7).....	179
X-1・2類	
第108図 搔器実測図(1).....	182
I-A-a・b・c、I-B-a・b	
第109図 搔器実測図(2).....	183
I-B-b・c、I-C-a・b、II-A-b	
第110図 搔器実測図(3).....	184
II-A-a・b、II-B-c、II-C-c	
第111図 楕円形搔器実測図(1).....	188
I-b-大・中・小、II-a-大・中	
第112図 楕円形搔器実測図(2).....	189
II-a-中・小、II-b-小	
第113図 楕円形搔器実測図(3).....	190
II-b-大・中	
第114図 楕円形搔器実測図(4).....	191
II-b-中・小	
第115図 湾入部ある搔器実測図(1).....	192
第116図 湾入部ある搔器実測図(2).....	193
第117図 石箆状石器実測図(1).....	196
第118図 石箆状石器実測図(2).....	197
第119図 異型石器実測図.....	198
第120図 片刃石器実測図.....	200
第121図 片刃・両刃石器実測図.....	201
第122図 両刃石器実測図.....	202
第123図 石斧実測図(1).....	204
第124図 石斧実測図(2).....	205
第125図 石鍬実測図(1).....	207
第126図 石鍬実測図(2).....	208
第127図 石鍬実測図(3).....	209
第128図 磨石実測図.....	211
第129図 石剣・石棒類実測図(1).....	214
第130図 石剣・石棒類実測図(2).....	215
第131図 石剣・石棒類実測図(3).....	216
第132図 石剣・石棒類実測図(4).....	217
第133図 石剣・石棒類実測図(5).....	218
第134図 岩版施工モチーフ模式図.....	219
第135図 岩版実測図.....	220
第136図 岩偶・不明石製品・有孔円盤状石器実測図	221
第137図 円盤状石器実測図(1).....	225
I類	
第138図 円盤状石器実測図(2).....	226
II類	
第139図 円盤状石器実測図(3).....	227
II類	
第140図 円盤状石器実測図(4).....	228
III類	
第141図 円盤状石器実測図(5).....	229
IV類	
第142図 円盤状石器実測図(6).....	230
IV・V類	
第143図 円盤状石器実測図(7).....	231
V類	
第144図 木器実測図.....	232
第145図 骨角器実測図.....	235
第146図 花粉分析PLATE.....	236
第147図 分光分析チャート.....	237
第148図 黒耀岩原石の例.....	261
第149図 X線回折チャート(1).....	264
第150図 X線回折チャート(2).....	265
第151図 X線回折チャート(3).....	266
第152図 X線回折チャート(4).....	267
第153図 胎土分析PLATE(1).....	272
第154図 胎土分析PLATE(2).....	274
第155図 胎土分析PLATE(3).....	276
第156図 胎土分析PLATE(4).....	278
第157図 分析実施試料一覧.....	281

付 表 目 次

第1表 岩手県東北縦貫道 関連遺跡名一覧	158
第2表 周辺の遺跡名一覧	5
第3表 土偶等出土状況一覧	103
第4表 土偶・土面他実測図説明	104
第5表 土版・装飾品説明	108
第6表 土製円盤実測図説明	113
第7表 土製円盤一覧表	114
第8表 土製円盤相関グラフ	115
第9表 土製円盤直径度数分布	115
第10表 土製円盤地区別出土数一覧	115
第11表 石器類個数一覧	119
第12表 石器分類基準	121
第13表 原石材質一覧	127
第14表 錐石材質一覧	130
第15表 石槍模式図・集計表	130
第16表 石槍材質一覧	132
第17表 石鎌A類模式図	133
第18表 石鎌A類集計表	134
第19表 石鎌A類材質一覧	135
第20表 石鎌B類模式図・集計表	144
第21表 石鎌B類材質一覧	145
第22表 石鎌C類模式図・集計表	146
第23表 石鎌C類材質一覧	148
第24表 石鎌D類模式図・集計表	148
第25表 石鎌D類材質一覧	231
第26表 石鎌E類模式図・集計表	150
第27表 石鎌E類材質一覧	153
第28表 石鎌F類模式図・集計表	154
第29表 石鎌F類材質一覧	158
第30表 石鎌破片材質一覧	158
第31表 石錐I類模式図・集計表	159
第32表 石錐II類模式図	161
第33表 石錐II類集計表	162
第34表 石錐III類模式図・集計表	163
第35表 石錐材質一覧	163
第36表 石匙模式図	169
第37表 石匙集計表	171
第38表 石匙材質一覧	172
第39表 撃器模式図・集計表	180
第40表 撃器材質一覧	181
第41表 楕円形撃器模式図	185
第42表 楕円形撃器集計表	186
第43表 楕円形撃器材質一覧	187
第44表 湾入部ある撃器模式図	191
第45表 湾入部ある撃器材質一覧	231
第46表 石箆状石器模式図・集計表	195
第47表 石箆状石器(大型)石材一覧	196
第48表 石箆状石器(中・小型)石材一覧	196
第49表 使用痕ある剥片材質一覧	198
第50表 片刃・両刃石器材質一覧	199
第51表 (磨製)石斧模式図	203
第52表 (磨製)石斧材質一覧	206
第53表 石鍬模式図	206
第54表 石鍬材質一覧	210
第55表 磨石材質一覧	212
第56表 石皿材質一覧	212
第57表 凹み石材質一覧	212
第58表 石棒模式図	212

第59表 石剣集計表	213	第68表 石器組成比(九年櫛)	254
第60表 石剣材質一覧	219	第69表 石器材質と器種一覧	255
第61表 円盤状石器模式図・集計表	223	第70表 分析試料一覧	262
第62表 円盤状石器材質一覧	224	第71表 X線回折ピーク一覧	263
第63表 獣骨他鑑定結果	235	第72表 胎土分析結果(1)	269
第64表 土器出土数一覧	245	第73表 胎土分析結果(2)	270
第65表 土器細別表	248	第74表 胎土分析結果(3)	271
第66表 石器組成集積グラフ	251	第75表以下、石器計測値他一覧表	283~
第67表 石器組成比(東裏)	253	第76表 土器実測図説明	376~

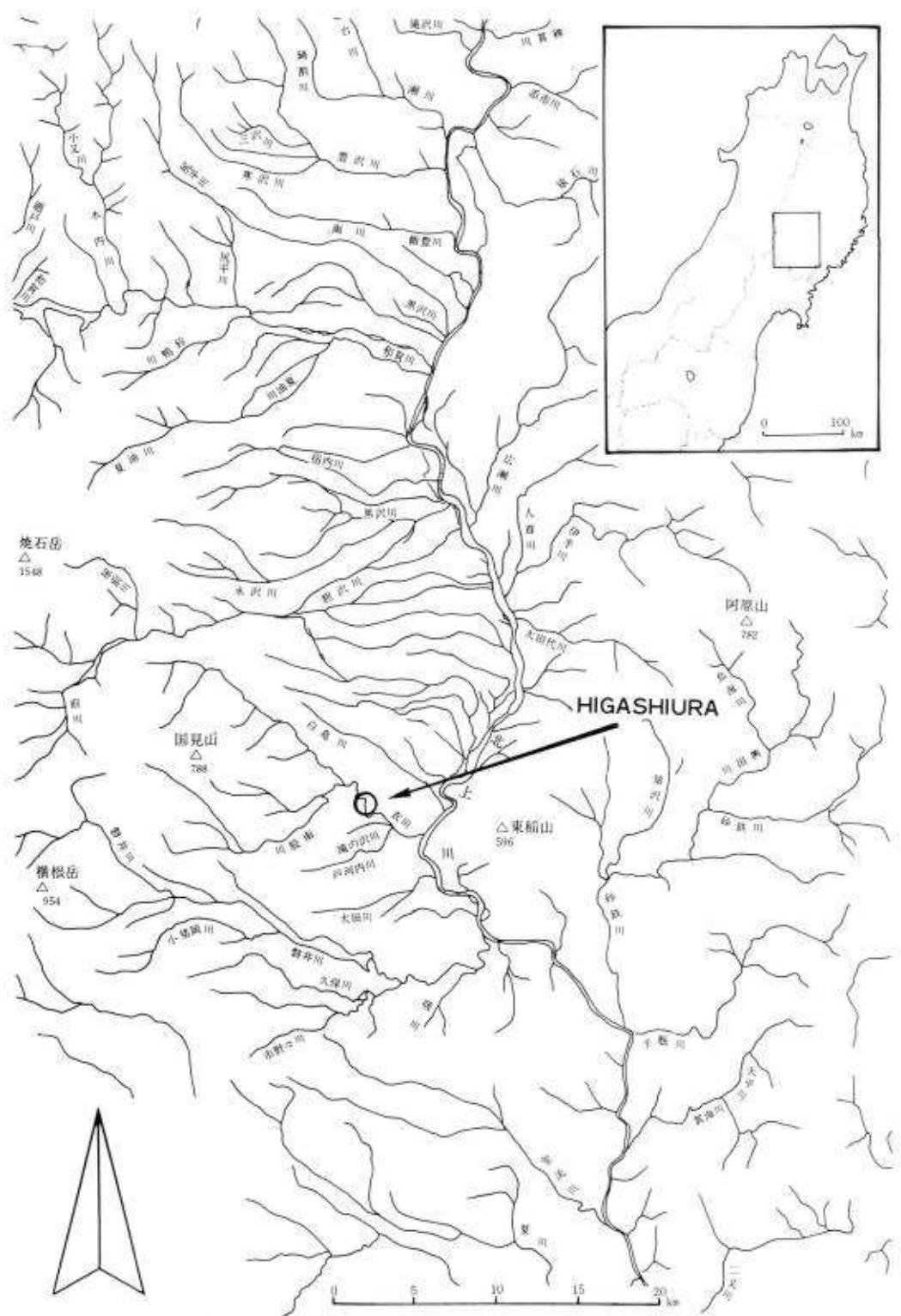
写 真 図 版 目 次

遺跡航空写真・周辺の遺跡	図版 1
暗渠排水路	図版 2
(A 地点の状況) 包含層北端付近	図版 3
(A 地点の状況) 包含層南端付近	図版 4
(A 地点の状況) 土器出土状況、正立位	図版 5
(A 地点の状況) 土器出土状況、正立位・倒立位	図版 6
(A 地点の状況) 土器出土状況、倒立位・横転位	図版 7
(A 地点の状況) 土器出土状況、横転位	図版 8
(A 地点の状況) 土器出土状況、横転位(内面露出)	図版 9
(A 地点の状況) 土器出土状況、横転位(内面露出)	図版 10
(A 地点の状況) 土器出土状況、横転位(内面露出)	図版 11
(A 地点の状況) 土偶出土状況	図版 12
(A 地点の状況) 土偶、剥片類集中出土状況	図版 13
(A 地点の状況) 石器出土状況、 石匙・両刃・石鎌・石斧・石鎌	図版 14
(A 地点の状況) 石器出土状況、 石棒・岩版・サメ歯	図版 15
(B 地点の状況) 土器出土状況、正立位・倒立位	図版 16
(B 地点の状況) 土器出土状況、 横転位、珪化木・石棒・土偶・土版・木器	図版 17
土器類、深鉢型	図版 18
土器類、甕型(1) 1、2、3、5、6 a・b類	図版 19

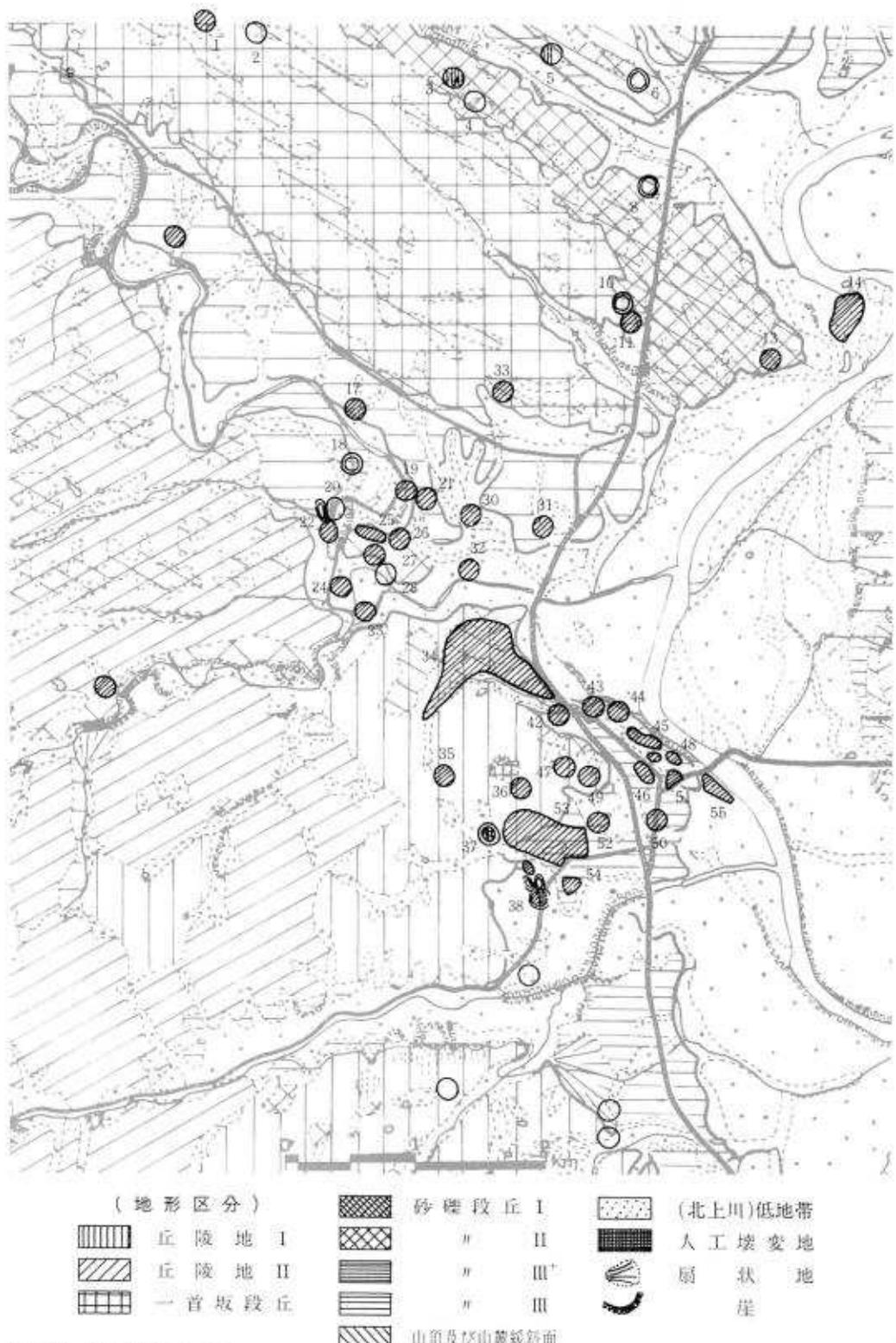
土器類、甕型(2) 7、8、9、10類、 鉢型 1、2 a・b・c・d類	図版 20
土器類、鉢型(2) 3 a・b類	図版 21
土器類、鉢型(3) 4 a・b、5、6、7、8、9 a類	図版 22
土器類、鉢型(4) 9 a・b ₁ ・b ₂ 、 10 a・b・c・d、12 c類	図版 23
土器類、鉢型(5) 12 a・b、13 a・ b ₁ ・b ₂ 、14 a・b、15、16	図版 24
土器類、鉢型(6) 16 b・c・d類、 台付鉢型 1 a・b、3、4	図版 25
土器類、台付鉢型(2) 4、5類、 皿型 1類	図版 26
土器類、皿型(2) 1、2、3、4類	図版 27
土器類、高環型、壺型 1、2、3類	図版 28
土器類、壺型(2) 4、5、6、7、8、9類	図版 29
土器類、注口土器(1) 1、2 a・b、3 a・b類	図版 30
土器類、注口土器(2) 4、5、6類、 香炉型、脚	図版 31
土器類、異型、香炉、注口土器の 成形過程	図版 32 の上段
土偶(1)	図版 32 の下段
土偶(2)	図版 33
土偶(3)	図版 34
sex symbol?	
土版、装飾品、土製円盤	図版 35
剥片接合資料	図版 36
黒耀岩破片	図版 37 の上段

石 槍	図版37の下段	
石器類、石鎌A類 I a・b、II a・b類	図版38	石器類、石斧、石鎌状石器(大・小) 図版47
石器類、石鎌A類 II b・c、III、IV a類	図版39	石器類、石匙、横型 図版48
石器類、石鎌A類 IV b、B類	図版40	石器類、石匙、横型(2)、縦型、 I、II、III、IV、V 図版49
石器類、石鎌C・D・E類	図版41	石器類、搔器A、B、C類 図版50
石器類、石鎌F類 I、II、III、IV類	図版42	石器類、橢円形搔器I a・b類 図版51
石器類、石錐、 IA・B、III類	図版43	石棒・石剣類 図版52
石器類、石錐、III類	図版44の上段	石器類、石棒・石剣類(2)、 岩版、岩偶 図版53
石器類、片刃・両刃石器	図版44の下段	骨角器・骨片 図版53の下段
石器類、両刃石器(2)、石鎌(1)	図版45	骨片・木器・種皮 図版54
石器類、石鎌(2)	図版46	サメ歯の化石(1) 図版55
		サメ歯の化石(2) 図版56

本文



第1図 遺跡の位置



第2図 地形区分図

1 遺跡の位置と地形・環境

(1) 地形概観（第1・2図）

本遺跡を含む「一関地区」（胆沢郡前沢町・胆沢町、同衣川村、東磐井郡平泉町、一関市のそれぞれ一部を含む）の地形を概観する。この地域の南には一関南方有壁丘陵、北には胆沢扇状地堀切段丘南部、東には北上低地帯と北上山地西端凸部、西には西南方に高まる段丘群が存在する。北上河谷帯（北上盆地）の南端部にあたり、水系の大半は西方から東流し、北上川に注ぐ。北方から南流する北上川は支流を集め、北上山地麓には沿って流れ、孤禪寺峡谷部にいたる。支流として胆沢川・衣川（北股川・南股川）・太田川・磐井川等がある。

この地域の地形形成において、地質時代の新世代第三紀以降の激しい地殻変動を考慮しなくてはならない。東方の北上山地が前述の時期以降も穏やかな地殻変動を経ていることと対照的である。この他の要素として新世代第四紀の氷河期における海水準変動がある。地域差のある地質構造と地殻運動と海水準変動に伴って浸食基準面が変化し、種々の地形が形成された。現在この区域内は西部から南東部にかけて諸丘陵によって古められている。これら南股・衣川・達古袋・有壁の各丘陵は古くから地形変化を経て現在にいたっている。凡例に示した丘陵Iは丘陵IIより起伏変化の激しい地形である。これら丘陵と同じ時間経過を経てきた一首坂段丘（北股丘陵）は現在位置の衣川の北東部に胆沢川によって形成されたと考えられている。一首坂段丘（高位）より一段低い中位段丘の砂礫段丘は、丘陵の周囲に形成されている。砂礫段丘I・II・IIIと細分される中位段丘は、胆沢扇状地（台地）では、上野原面・横道面・高橋面・福原面と呼ばれ火山灰の堆積が認められる。それらの一部が前沢火山灰とそれを覆う黒沢尻火山灰であるが、その供給源は未詳である。以上は約3万年前までのことを考えられる。

低位段丘（Gt III）は胆沢扇状地近くにては北上川寄りに、南方にては磐井川の周囲に分布する。この面の形成は所謂後期旧石器時代であるとされる。前述の氷河の最盛期は約2万年前でそれに伴なう海水準変動が北上川の河道を通して浸食基準面変動に影響を及ぼし続けてきた。低位段丘形成後の火山灰は俗に「粉状バミス（水沢火山灰・盛岡火山灰などの呼称もある）」といわれる歴史時代（古代）のごく小規模なものが見られる程度である。

(2) 遺跡の位置と立地・周辺の遺跡（第1・3・4図、図版1）

調査地は岩手県胆沢郡衣川村大字下衣川字東裏40番地に所在する。衣川村の東南端部付近である。周辺の地形について再述する。「土地分類基本調査」によると衣川村の地形は三大別され、④丘陵地、⑤台地、⑥北上川河岸低地からなる。④は村の北限を画す北股丘陵（中川氏他の一首先坂段丘に相当）、西南半に位置する南股丘陵、東南半を占める衣川丘陵からなる。最後者に中尊寺他諸寺社がある。⑤は北股川、南股川、合流して後の衣川のそれぞれの流域の谷あいに発達する衣川台地である。狭少ではあるが段丘面の発達が数段見られる。その中では胆



第3図 遺跡位置・周辺の遺跡分布図

第2表 遺跡名一覧

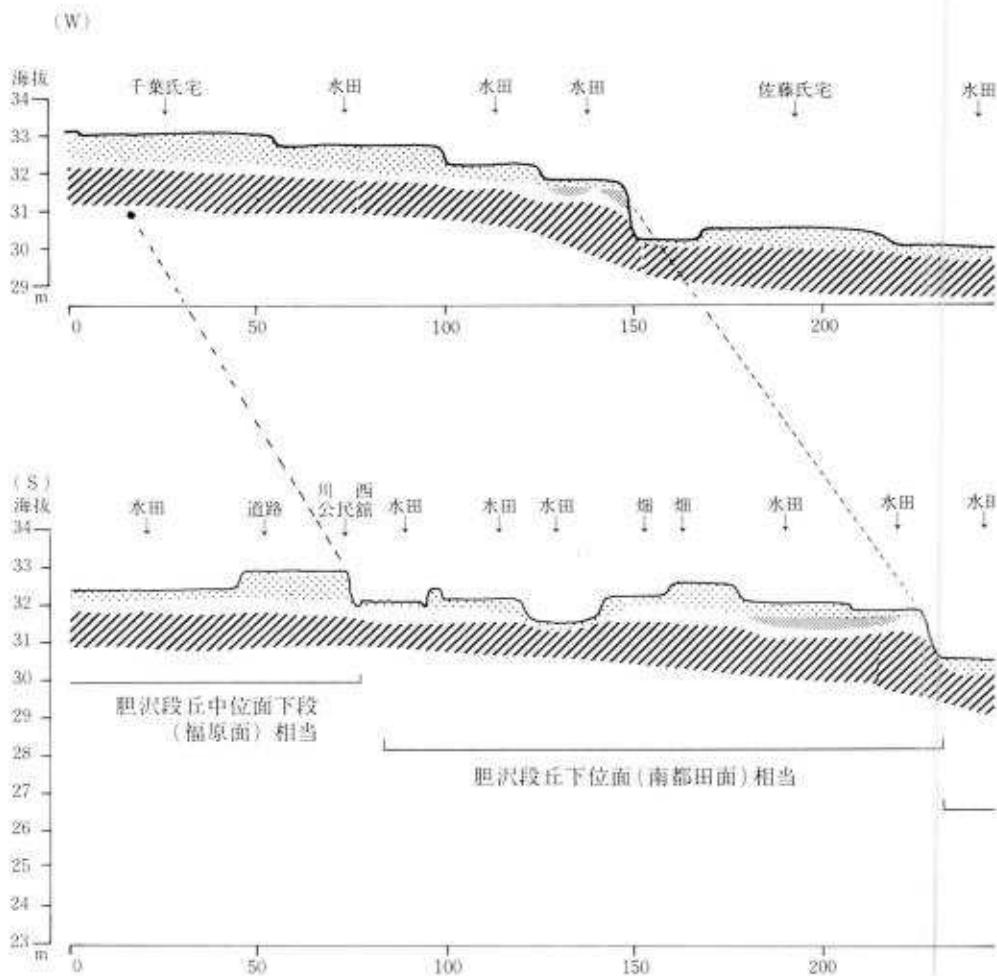
No.	遺跡名	所在市町村	種別	No.	遺跡名	所在市町村	種別
1	一ヶ坂	前沢町	散布地、土師・須恵器	30	室ノ樹	衣川村	庭園跡(?)
2	長板	"	"、石鐵	31	九輪堂	"	墳墓(?)
3	白鳥永沢	"	"、縄文	32	接待館	"	居館跡(?)
4	永沢東	"	" "	33	円形陣場	"	陣場跡(?)
5	合ノ沢A	"	"、縄文中期・須恵器	34	中尊寺	平泉町	寺院跡
6	泊ヶ崎	"	"、縄文、弥生(天王山)	35	鐘ヶ岳経塚	"	経塚
7	道場	"	"、縄文後期	36	鈴懸森経塚	"	"
8	新城	"	"、縄文、土師・須恵器	37	大沢	"	縄文中・晚期散布地、近世民家
9	生母宿	"	"、弥生(?)	38	毛越	"	塚他
10	徳沢一里塚	"	一里塚(一対)	39	平泉勅使館	"	居館跡
11	舞鶴公園附近	"	散布地、須恵器	40	新山権現	"	
13	衣闌	"	"、土師器・須恵器	41	月館	"	散布地、縄文中期
14	白鳥館	"	居館跡	42	弁慶の墓	"	塚
15	池森	"	散布地、石鐵	43	衣闌古墳	"	墳墓(?)
16	前水	"	"、石鐵	44	義経堂館	"	居館跡
17	向館	衣川村	居館跡、散布地、土師器	45	柳御所館	"	"
18	東裏	"	散布地、縄文晩期、平安	46	"(II)	"	
19	衣川渡船場跡	"	渡船場跡	47	金鶏山経塚	"	経塚
20	小松櫛・北館	"	居館跡、縄文中期集落、平安末集落	48	柳御所(1)	"	
21	長者ヶ原庵寺	"	寺院跡	49	花笠庵寺	"	寺院跡、須恵器、瓦
22	館城館	"	居館跡(?)、一字一石経塚	50	無量光院	"	"
23	大手館	"	"	51	伽羅御所II	"	平安時代
25	衣川堀	"	"	52	平泉瓦窯跡	"	瓦窯
26	售森	"	墳墓(?)	53	毛越寺	"	寺院・庭園跡
27	並木屋敷	"	居館跡	54	国衡館	"	居館跡
28	関の明神	"	祭祀跡	55	伽羅御所	"	"
29	琵琶相	"	居館跡	56	八幡宮	"	散布地

沢段丘中位面下段(福原面)相当、胆沢段丘下位面(南都田面)相当の二面がもっとも顕著である。④は現国道四号線以東に発達する。なお衣川は川東附近で大きく蛇行し西北方へ進み、さらに後に南方に流路をとり衣川丘陵へまつかり、東方へ転じ北上川に注ぐ。旧氾濫原には旧流路の痕跡も認められ、遺跡東方や南方に存在する。後者は北館遺跡との中間を西北方にむかってのびている。

遺跡は前述の蛇行部分の西方(内側)で、福原面と南都田面の両者にまたがって存在する。

狭義にとれば調査地は南都田面にのっているが、後述のように本来の遺跡はさらに西方にのびていたことが確実であることから、先のように述べた。周辺は開田が進み旧地形はそこなわれているが、前者の段丘崖線は千葉氏宅地東縁、後者のそれは調査地東端（B地点）に求められよう。田沢濫原（谷底平野）は湧水の激しい湿地をなし、黒泥層等の発達が見られる。その下位には礫層が位置する。前述の理由から、遺跡の北・東方の二方向に衣川がひかえることになる。

以上、本調査地は至近の距離に河川をひかえた、若干の高地の縁辺に立地することになる。

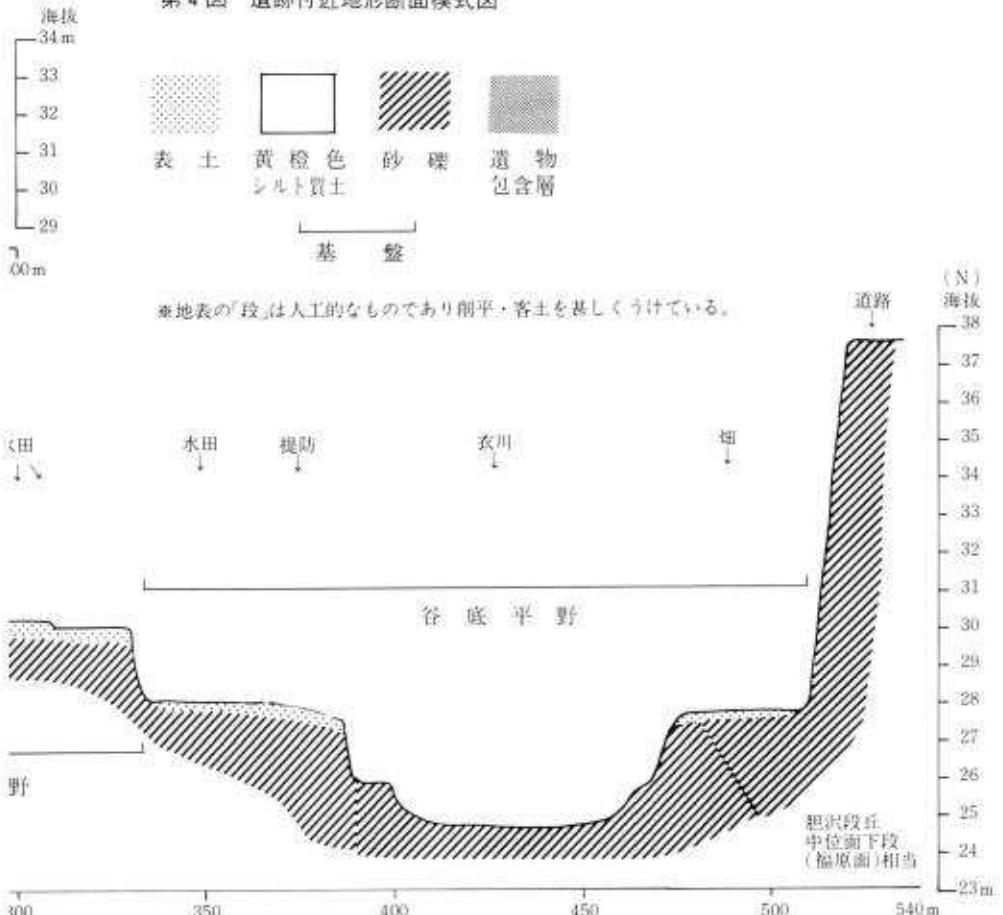


(3) 周辺の歴史的環境

おもに北上川以西について簡単に見ておく。まず所謂先史時代についてはほとんど明らかになっていない。西部の高位の段丘面上には数多くの遺跡が知られているが、この地域については未詳な面が多いといわざるをえない。詳細な分布調査をはじめとする基礎的作業の集積が急務である。その中では衣川村北館遺跡は注目されてよい。既に詳述されているように北館遺跡は東裏遺跡の南方約0.3kmの福原相当面上にある。その東を衣川に、西を小成沢により開析された狭長な台地上にのる。大木7a・7b・8a・8b式等を含む遺物包含層と、そのうちの一時期の竪穴住居跡からなる。少なくともこの二種を構成要素としてもつ集落といえる。これは推定される東裏遺跡のあり方とも共通するものである。縄文時代中期と晩期の遺跡立地に共通性があるとも見える現象が地域的特徴か、あるいは普遍性を有するかについては今後も検討を要しよう。

(E)

第4図 遺跡付近地形断面模式図



また北館遺跡出土資料の中には円筒上層式的な色彩の濃厚なものも少量存在する。岩手県における円筒土器系統出土の南限は一関庄司台遺跡といわれている。^{註21} 岩手県央（盛岡市）～県央やや南部（紫波郡・稗貫郡等）を境界として円筒土器系統資料の出土は減少するが、北館からも出土している点は一応注意されてよかろう。弥生時代についても未詳といわざるをえない。

歴史時代についてもその資料には偏在性がある。古代とりわけ古墳時代・奈良時代・平安時代初期に関するものは現状では欠落しているかのようである。しかし北隣の胆沢町角塚古墳の存在や、前沢町明後沢遺跡^{註22}の存在などを考慮すると、それぞれの時代の諸遺跡が存在する可能性はきわめて大である。とりわけ平安時代初期における律令政府の進出・拠点建設には、その背景として、それに見あう生産力を有する在地集団の存在が不可欠となっていることが明らかになりつつある現在では、先の想定は十分に根拠のあるものである。さらには未確認ではあるが明後沢北隣の志太見沢には須恵器他の窯跡^{註23}の存在する可能性もある。明後沢よりは鬼面棟端瓦も出土しており、律令政府の官衙乃至それに準ずる何らかの遺跡が将来検出されることが期待される。

古代末期の平泉藤原氏関係の著名な諸遺跡・諸遺構についてはここではあえてふれない。

地域の伝承によると、藤原氏に先行する安倍氏関連とされる諸遺構（とりわけ居館・墳墓他）も多い。しかし現状ではそのそれぞれに確実な証拠が伴なってはいない。今後は個々の遺構・遺跡の年代・時代・時期の確定等を基礎的作業として進め、その正当な歴史的位置づけを行なう必要がある。近世とされるべきものが多いと予想される。

しかし居館跡（館・柵と呼称される）とされるものが多いことは事実であり、この地域の交通上の要地としての性格を物語ってはいるであろう。即ちこの地域には東流して北上川に注ぐ支流が多く存在し、それと安倍氏の諸柵の所在伝承地が相関関係をもつてのこと、衣川河西地域に達谷窓方面へと連結する、ひいては西方との連絡路としての性格を有する古道が存在したなどの伝承はその地域的重要性を反映したものではある。東流する河川・東西にのびる諸段丘面群と各時代の政治圏のあり方は究明るべき一大課題であろう。

最後に本遺跡に隣接する周知の遺跡を示しておく。番号は地形図のそれである。

- ①向館 ②衣川渡船場跡 ③小松柵擬定地・北館 ④長者原廃寺 ⑤館城館（衣川柵擬定地）
⑥大手館 である。

- 註1) 北上山系開発地域 土地分類基本調査 一関 5万分の1 国土調査 岩手県 1978年
土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう調査 水沢 5万分の1 国土調査 経済企画庁 1963年
- 註2) 中川他 北上川中流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四系地史(2)—地質学雑誌第69巻第812号 1963年5月
- 註3) 岩手県文化財調査報告書第54集 東北縱貫自動車道関係埋文化財調査報告書V 所収
- 註4) 角塚古墳調査報告 胆沢町教育委員会 1976年3月
- 註5) 板橋他 明後沢古瓦出土遺跡—前沢町古城所在古代城柵跡—岩手県教育委員会文化財調査報告書第14集 昭和40年
- 註6) 伊藤鉄夫氏の教示による
- 註7) 一関市史 第一巻・通史 一関市 昭和53年8月

II 遺跡の層序と土質その他（第5・6図）

調査地の基本層序は大略以下のとおりである。I層、基層の上位にのる諸層である。Ia—表土。暗茶褐色シルト質土。水田の耕作土である。Ib—褐色シルト質土。部分的には耕作が及び遺物も若干量混在する。Ic—黒褐色シルト質土。黒ボク様土。主包含層であり、各種遺物・礫等を多量に含む。Id—褐色シルト質土。遺物が殆んど見られない。

II層、基盤層であり、調査した限りでは二大別できる。IIa—黄橙色粘土質シルト、IIb層—礫層、人頭大のものを含む基盤礫層。

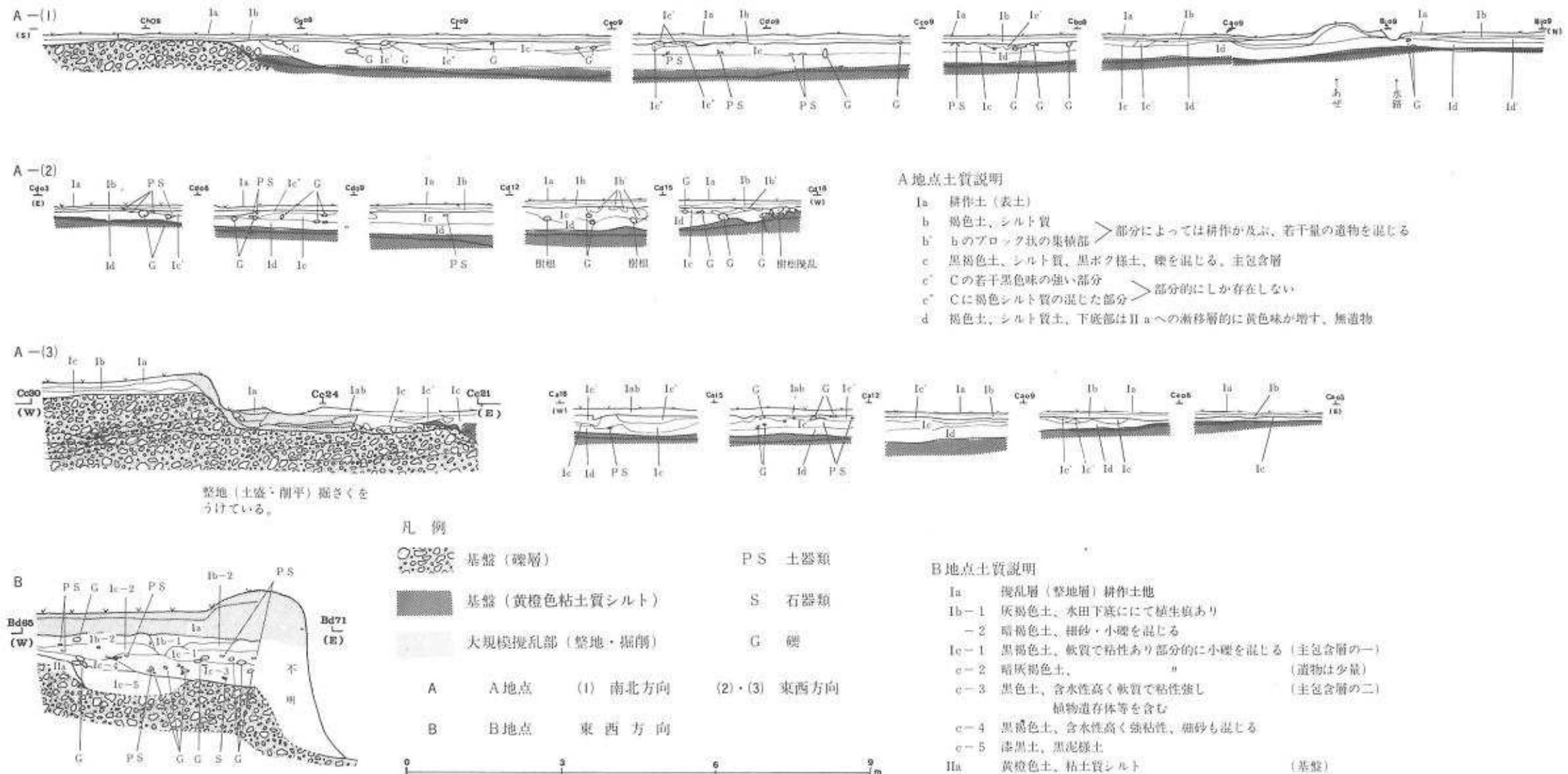
以上の知見は南都田面におけるそれであり、その西方の福原面のそれについては正確な調査は実施しなかったが、現時点ではIb～d・IIaを欠くらしい。ただし、南隣の福原面上の北館においては、Ia相当の下位にIIが来ることは確実であり、包含層を除いては大略類似していると見做してよい。

上述のIIbの上面はかなり凹凸に富み、また傾斜面をも形成している。これは低位段丘の基盤礫層の上面に通有の現象でもあり、また段丘崖縁辺に位置する、ひいては河川に隣接し水力をうけやすい立地条件にあることに由来するものであろう。IIbは大略東方と南方に傾斜し段をもつが、前者は衣川へむかって降り、後者は既述の旧流路による開析部（沢状地形）へ降っていくことに由来する。IIaはIIbにはば整合に堆積しており、同様に凹凸に富む。凹凸の中にはそれ自体で完結した凹み乃至溝状地形を呈すものがあり、それは南北方向に長い溝状をなす。I層はII層の凹凸を埋める如くに堆積しており、その上面はほぼ平坦である。

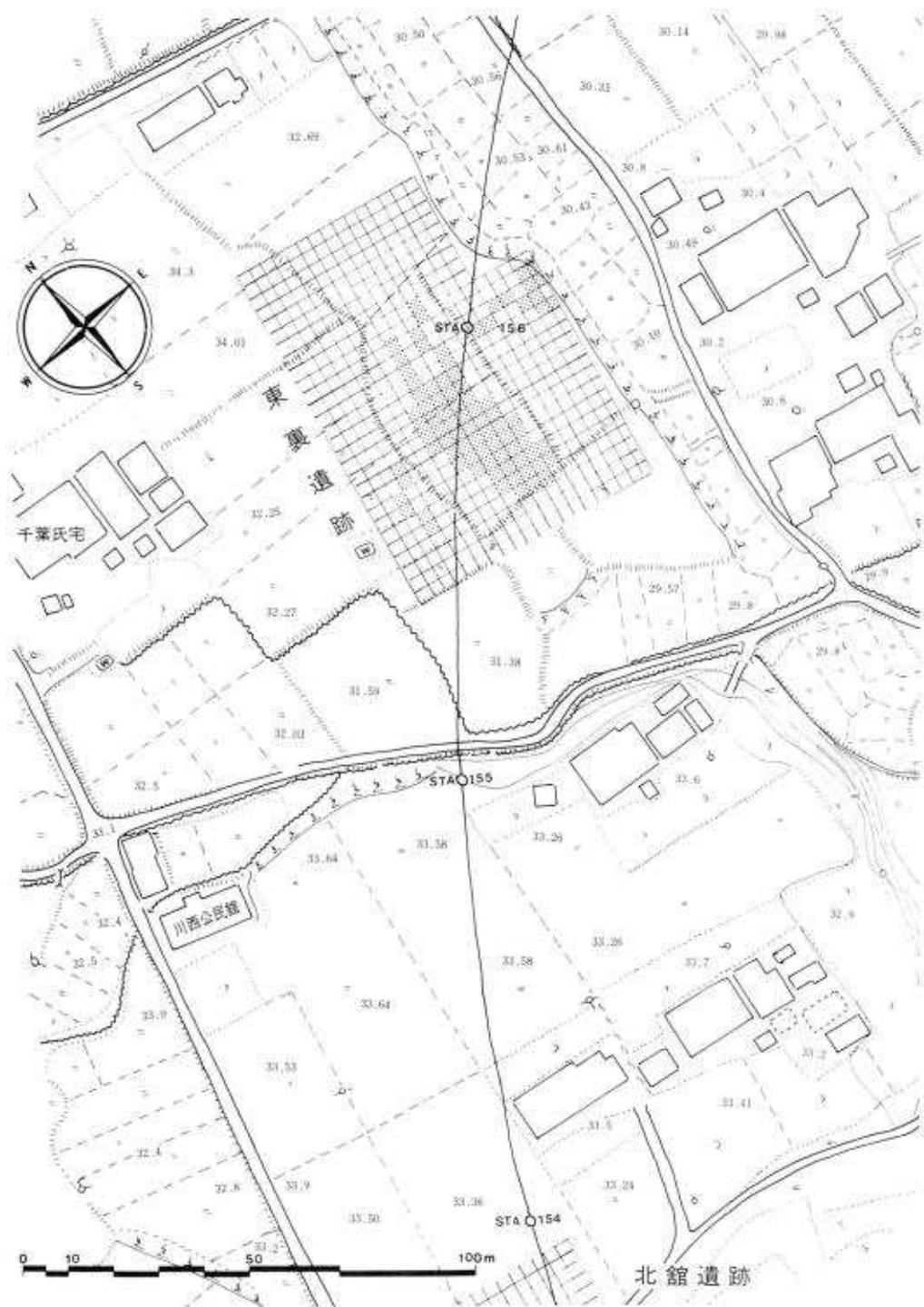
以上の層序と遺物包含層の形成には相関関係があると思われる。即ち南都田面の段丘崖たる斜面に形成されたB地点、南都田面上の溝状の凹部に形成されたA地点である。後者は、既に凹みの形で存在した溝状地形を（後述のようにその北半から徐々に南半に進む形で、生活諸用具の廃棄場所として）選択・利用したものと考えられる。また礫が混在し、かつIcの出土層位の上下位に関係なく遺物が接合することからすると、その形成の過程で水力その他のによる擾乱をうけた可能性が大きい。ただし後述のように大洞C式のある時期には、その包含層の上面に焼土の散布が行なわれるような用いられ方もされているのであり、常に湿地であったわけではなかろう。A地点に類似するものとして南隣の北館遺跡の遺物包含層がある。福原面の基層に形成された蛇行する溝状地形（その形成は水力に由来しよう）に縄文中期の諸遺物が堆積しているのである。ほぼ同一のものといってよい。

B地点の如きは、時代・時期に関係なく、比較的多く見られるものではある。

なお、本報告書中の遺物説明表等にI、II、III他と表記しているが、IはIaに、II、IIIはIcの上・下位にそれぞれ相当する。M、Lは、中位、下位の意味である。



第5図 遺跡の層序と土質



第6図 遺跡周辺地形図・グリッド配置図

III 発見された遺構・遺物

1. 遺構（第6・7図、図版2～4）

(1) 繩文時代晚期に属する遺構は検出できず、所謂遺物包含層2地点を検出したのみである。A・Bの二地点であり、その様相が若干異なる。

(a) A地点 調査地のほぼ中央部に検出された。長径30×短径12mの不整な長方形の範囲である。NW～SEの方向に走り、その縁辺には若干出入りがある。その西限は福原面の段丘礫層、その北・東・南限はIIaである。即ちA地点は南都田面上に存在した溝状の凹み中に形成されたものである。この溝状の凹みの成因は既に述べたとおり自然の営力、とりわけ水力に由来するものと思われ、人為的な掘り込み類乃至所謂大型住居の類ではないと思われる。

これと同様の溝状凹み、ひいては遺物包含層がさらに存在した可能性については、全面調査を実施しなかったので不明であるが、地形や若干数の試掘グリッドの知見からして、おそらくは存在しなかったと考えられる。

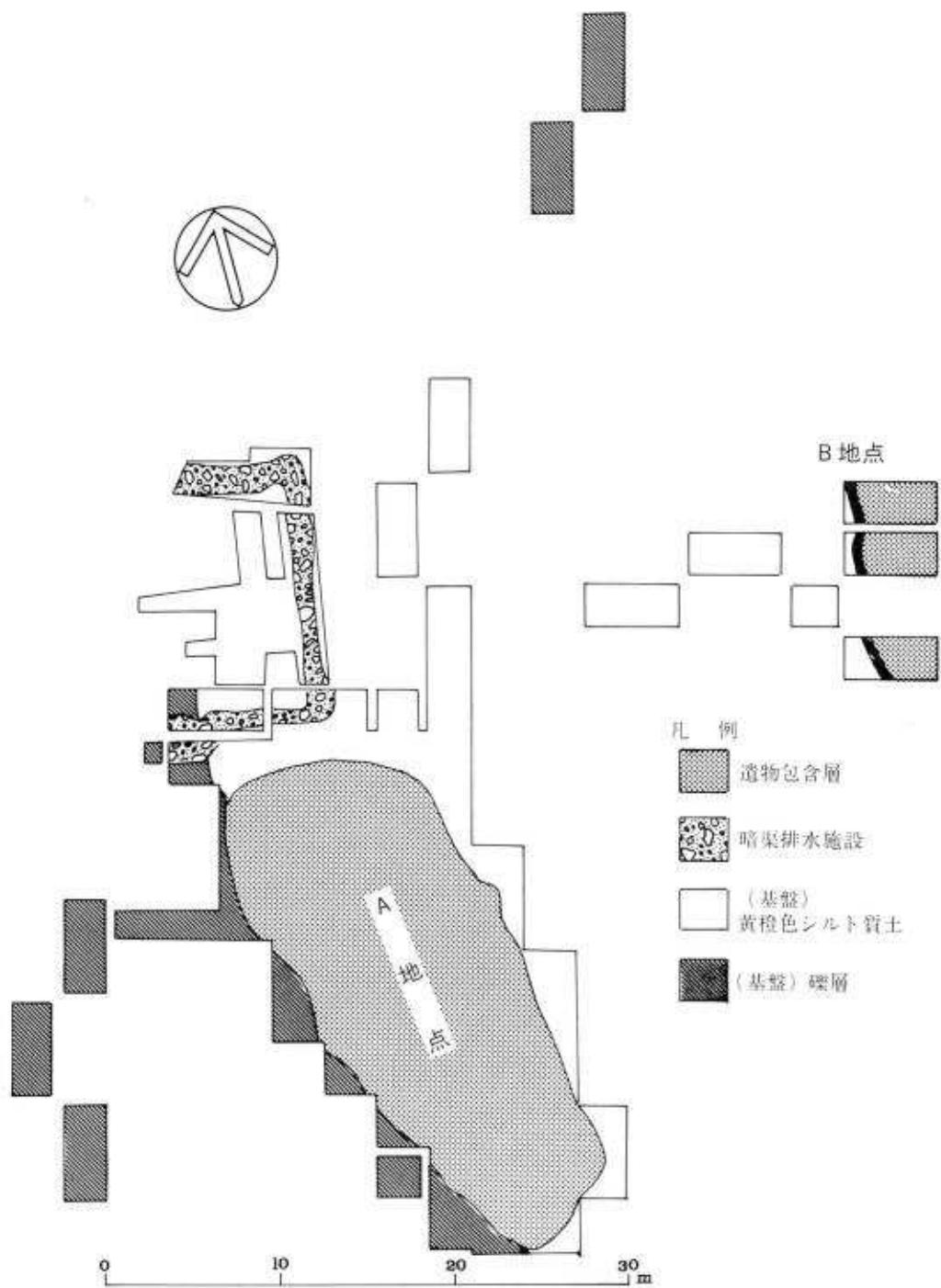
(b) この包含層の東南部（大洞C₁式土器を主体的に出土する）において、炭化物・焼土ブロックが径6mほどの範囲に散布していた。炭化物は植物質・動物質のものからなり、鹿角他の細片、骨角器片なども含んでいた。焼土ブロックはいずれも浮いた感じの強いものであり、その場で火力を用いて形成されたものとは考えがたい。最近注意されることの多い“焼土投げ”で、的性のものと考えたい。その周辺の遺物出土状況には特記すべき現象は観察できない。以上のA地点からは縄文晚期の大洞B・BC・C₁式の諸遺物が主体的に出土した。

(c) B地点 調査地の東端部の南都田面の段丘崖と思われる部分の傾斜面と、その裾部に検出された。斜面下位は勿論、裾部、さらには下位の旧氾濫原とともに涌水が激しく湿地帯をなす。したがって、植物質の遺物も若干量残存していた。ただし泥炭層の発達は見られず、黒泥化していた。したがってこの地点の土層の花粉分析はさしひかえた。得られた遺物は晚期後半、大洞C₂式（～A式）のものが圧倒的多数を占めた。

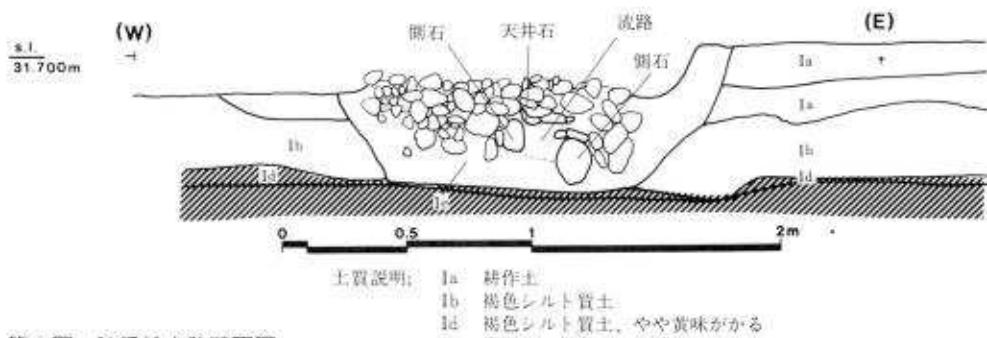
B地点は現状では明確な崖乃至段状をなすが、これは最近の開田工事によるもので、本来は現状よりは緩傾斜をなして氾濫原へ下がっていったらしい。なおA地点の包含層下位層は先の理由で確認出来なかつたが、その西限には礫土面が露出していることから、おそらくはIIaを欠いてIIbになる可能性が高い。

このIIb上位にはIIaがのるもの、遺跡北方ではIIaを欠く部分もある（福原面ではない地点）。したがってIIb上面が波うつことは明らかである。

(2) 歴史時代の遺構（第8図、図版2） A地点の北隣に巾1m前後の礫を用いた暗渠と思われる排水路を検出した。上巾1.0m×深さ（検出面より）0.6m程度の溝状の掘り込み（布掘



第7図 遺構・包含層配置図



第8図 暗渠排水路断面図

り地業的処理と思われる)をつくり、その底面に巾0.4m程度に礫を二列に配し側壁とし、その上に板状その他の礫を天井石風に架す。その上位に巾1mにわたり礫をうめ込み、その上を土で覆っている。現状の平面形はコ字形をなし、南北長15m×東西長9mの規模である。その西限は不明であるが、福原面の段丘礫層へも若干切り込んでいることは確実である。

この周辺・礫中からは縄文晩期・土師器・須恵器・陶磁器・石臼などが出土しており、そのもっとも新しいものを採れば、近世以降のものということになろう。それ以上の時代・時期の特定はひかえておく。

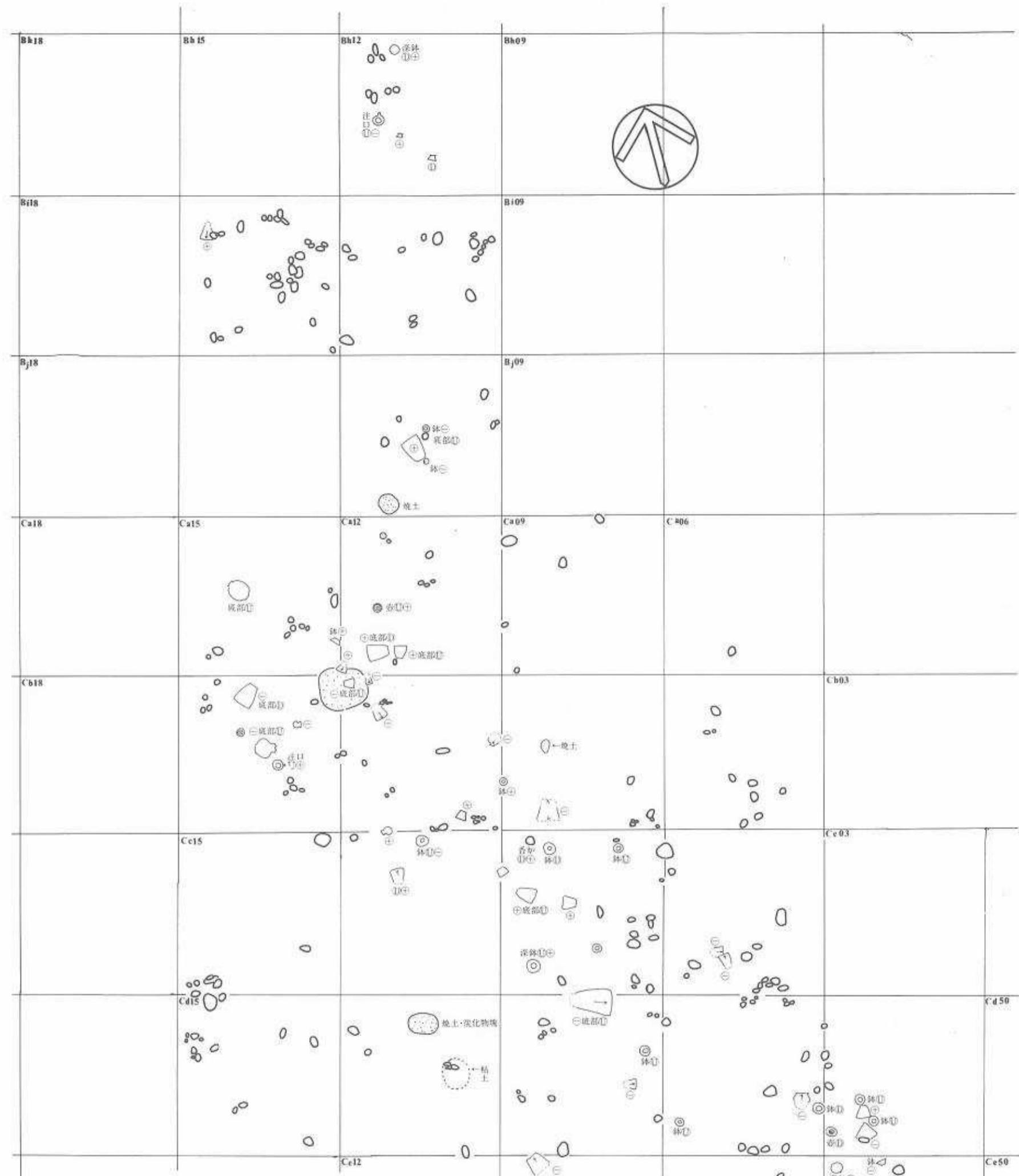
なお旧地権者千葉太四郎家の屋号は「石翁」であり、安倍氏関係の倉があったとの伝承があるが、この排水施設はそれとは無関係であろう。ただし、破片の中には古代末期と思われるものも存在するのは事実である。

2. 遺物 ガンポール箱 100前後の大量の遺物をえた。以下にそれを記す。

(A) 土器類の出土状況について (第9図、図版3~11)

A地点を対象として、土器類の出土状況の概略を記す。A地点においては既述の1c層より多量の遺物の出土をみた。本来その出土状況は実測され詳細に記録されるべきものであるが、調査計画の都合上それをなしえなかつた。まことに遺憾である。今後この種の結果をひきおこさないよう努力したい。その代替措置として出土状況の模式図を作成した。観察項目は以下のとおりである。

- (1) 器種の区別 深鉢(甕も含めた。比較的大型の伝統的な煮沸用容器の意である)、皿・浅鉢(これも一括した)、壺、注口、台付鉢、その他特殊器種(香炉等)、土偶
- (2) 破損の状況 完成品、口縁部欠失、土偶にあっては体部における部位
- (3) 遺存姿勢 正立位、倒立位、横転位(図版5~11)
- (4) 破損品等の場合の表裏面の別 表面を上にするもの、内面を上にするもの
- (5) 方向 口縁部(又は底部)の大略の方位、注口部の方位



第9図 土器類出土状況模式図

(A地点 Ic層の一部)

凡例

	深 鉢		粘土集積部
	甕		焼土炭化物集積部
	鉢皿		碟
	壺		
	注口		
	台付鉢		
U	正立位		
D	倒立位		
+	表 面		
-	内 面		

0 1 2 3 4 5 m

以上の結果が第9図である。以下に特徴的事項をのべる。⑧まずその配置は、NW～SEの方向に、若干蛇行しながら帶状に分布する基本的平面分布を示す。帶状分布は一連ではなく、その中に2大群（南北2大群）と4～5の小群を含むものと見ることもできる。即ち小群の集合からなると思われる。

⑨遺物間に礫が混在する。両者の上下の位置関係には一定の規則性はない。その配置に人為的乃至造構と認定すべきものは観察できなかった（3個が重複した例は存在したが偶然であろう）。したがって本包含層中の礫自体のあり方にはあまり重大な意味は無いと思われる。その存在の原因は不明であり、想定しうる可能性のみを記すにとどめる。即ち、人為的な投棄によるもの（さらなるその背景は不明）、水力その他の自然の営力によるもの、河岸段丘の基盤礫層をその眼前下位に控えることから、本来この地点に存在していたもの、等である。以上の三者の可能性は密接不離のものとして併存し現状の姿となつたとするのが、真相に近いのであろう。なお、遺物の接合状況からして、本包含層の遺物・礫が何らかの“擾乱”をうけていることは事実である。それは人為に加え水力他の自然的なものであった可能性が高い。

⑩器種にかかわる何らの傾向性も指摘できない。日常的生活容器がほぼ平均的に見られる。既述の小群別の異同も認められない。注口土器が南北の二群にそれぞれ存在する点は注意されるべきかとも思われる。深鉢類が多いのは当然である。

⑪完全品は少なく、破損品が多い、大型品のはほとんどは破損品であり、復元しても原型に復する例は少ない。底部欠失例が多い。

⑫遺存時の姿勢と器面の関係を見ると、倒立位は少なく正立位と横転位が多い。正立位は本来はその比率がさらに高かった可能性がある。それは、現に横転位をとるもの底部が正立位を示すことが比較的多い事実と、器内面を上にして破損している例が多いことなどから想定しうる。いずれにせよ例立位は少なく正立位・横転位が現状では多い。

⑬遺物の方位についての一定の方向性・傾向性は指摘できない。ただし既述の小群の内部において、器種によっては（とりわけ深鉢）若干の方向性を示すとも見えるものも存在する。しかしあえて強弁はしない。

以上の⑪以下の観察は、全資料・礫がその第一次の位置・姿勢を保つと仮定した上のものである。既にのべたとおり、本包含層は何らかの“擾乱”をうけている可能性が大きいのであり、如上の観察もその限界は明らかである。それを承知の上であえて試みたものである。ここでは⑪のみを若干の特記事項として提示するにとどめる。なお南北二大群と焼土・炭化物の存在とが関係するとも見える点も当然指摘できよう。

(B) 土製品の概要

以下に土製品（土器・土偶・その他）の個別説明を行なう。通常行なわれている種別にしたがって大別し、さらにそれぞれの内部における器形・施文等の異同を基準に細分した。土器から行なう。

一、土器類

① 深鉢（第10～12図、図版18） 外傾気味の体下半より直上気味に推移する体上半をもつものである。外傾気味のままで端部に達するものが主である（つまり最大径は口唇部にある）が端部径が胴径より小さいものもある。大きさには大・中・小の三種がある。最小のものは鉢形と区別しにくいか、口径<器高的なプロポーションを概ね深鉢とした。口唇はすべて平坦（所謂平縁）で研磨される。ただし、端部外面が入念な研磨をうけて若干器厚を減じているもの（4類）、内面方向に肥厚部乃至張り出しをもつものなども存在する（3類）。しかしこれらも意図的なものとは見做さず一括扱いでよいと思われる。内面は全面入念にヘラミガキされる。

例外的な存在として所謂小波状口縁をもつもの（2類、第12図 538）がある。波状化は上方からの圧力によっており、凹み部分の内面に粘土の盛り上がりを伴なう。口縁直下に無文帶を伴なうものと伴なわないものの二種がある。

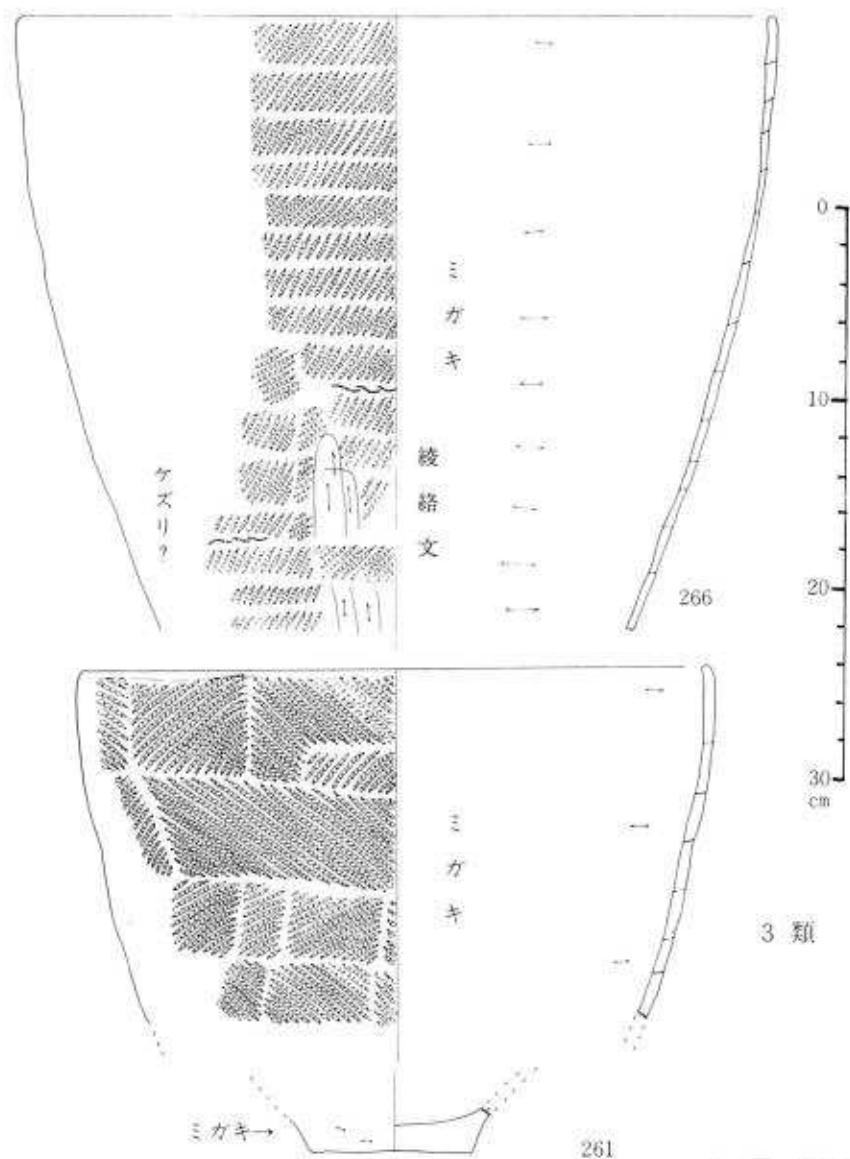
施文は体部の繩文のみである。繩文施文は極めて入念である。これは先のミガキと同様の特徴であり、この種土器を単に“粗製土器”としては決してかたづけられない要素である。繩文は帯状の斜繩文が主、羽状繩文從の形で併存する。後者には結束された原体によるものは殆ど無く、同一原体の回転方向を変えたものによるものが多い。上下方向に展開するもの、横向きのもの、両者混在のものなどがあり、この点は若干不整な印象がある。前者は整然としたものが多い。横位展開の帯状斜繩文の形式であるものが大部分である。体部全面にわたり整然と施文されるもの、上半は整然・下半若干不整のものがある。1回の回転動作のかなり短かいものも多少はあるが、概ね長い呼吸で施す。所謂綾絡文を伴なうものも多く、本遺跡の深鉢型土器の一特徴をなす。なおこの種文様の存在は深鉢型以外の鉢型・甌型にも極めて顕著に見られることは別にふれるとおりである。

成形は3～4cmの粘土紐（素地）の積み上げ・接合によっている。器面をヘラ削りした後に繩文施文（外面）、ヘラナテ・ヘラミガキ（内面）などの仕上げの器面調整が行なわれる。体部外面下端部には無文部が設けられ、ヘラ削り・ヘラミガキのみが施こされる。底外面は平底でヘラミガキされる。

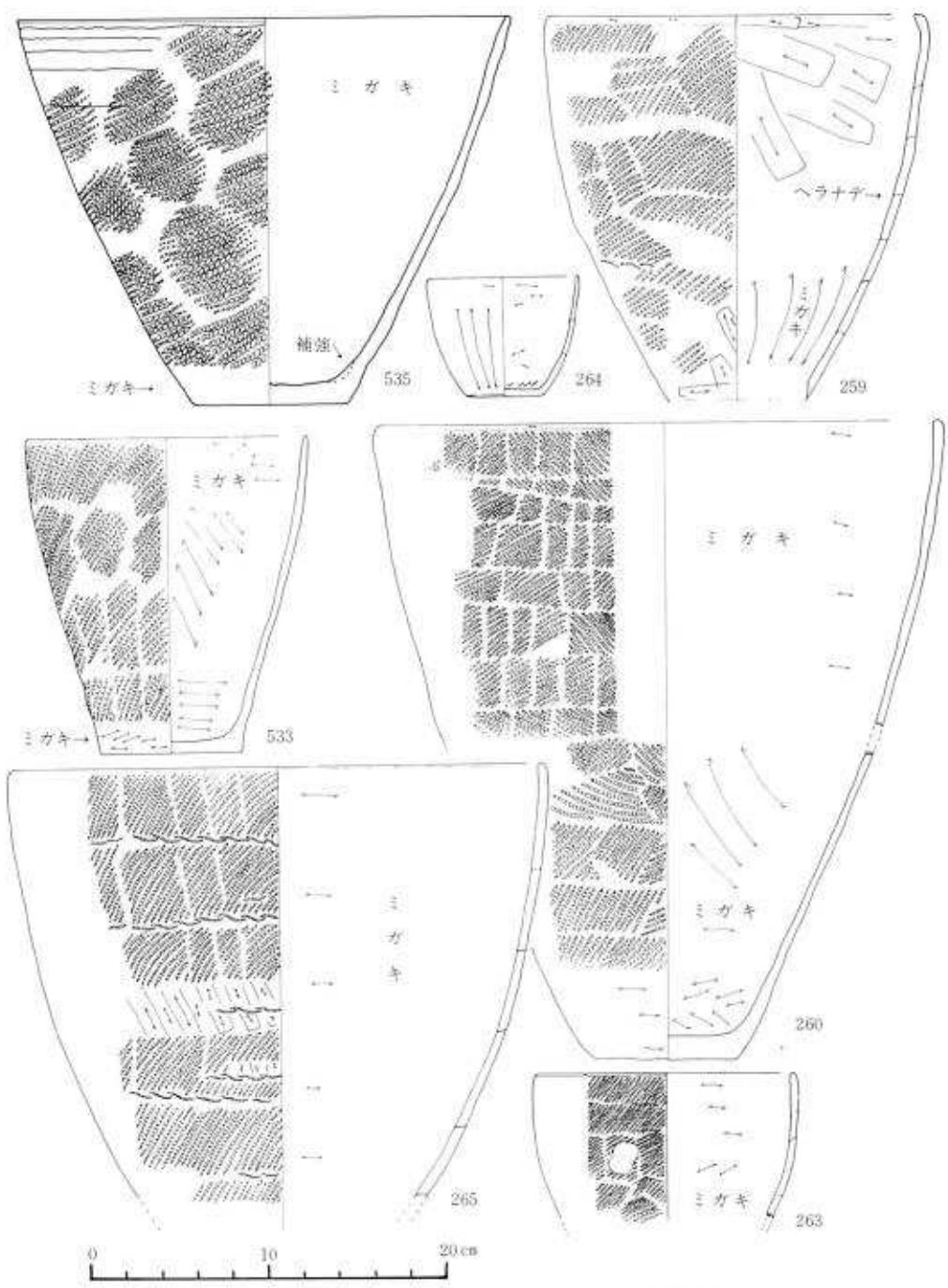
以上の深鉢型土器の体部内外画面には煤様の炭化物が付着する。したがって何らかの形で火にかけられた（ひいては煮沸用の器種なる）ことは明らかである。煤様のものの残存部位には数類型あるらしい。内外面ともに、体部上半・下半の別はあるらしい。この部位の詳細な検討

は行なわなかったが、使用状況復元のためにもこのテーマは今後検討されるべきであろう。

これらは概ね晩期前半期のA地点から出土したものである。したがって時代・時期も大略それと考えておく。ただし、晩期後半期にもこの種の深鉢が存在するのも事実であり、B地点出土のものは、やはり後半期のものであろう。一般的に（他地域においても）この種深鉢の組成内比率が減少傾向にあることを念頭においてあえて指摘しておく。



第10図 深鉢型土器実測図(1)



第11図 深鉢型土器実測図(2)

すべて3類